

学生大会成功に向けこゝ

二部のすぐこの号で語る

学苑急進生大会が6月11日開催されます。この大会には、さりとて六月安原粉碎斗争への決起集会として位置付けられなければなりません。いままでの学生大會のうちに、單に規約にのつてゐるかく、形式的に開いて統括、情勢、仕事方針等を決議するといふのは決定的に不十分であり、現在の状況に適していません。そこで我々は、この大会に向むけた各々がスムーズに開ける徹底した討論と、それがもとにしたクラス運動をもたらすことを委員会運動の構築を呼びかけているのです。

その高揚をもってはじめて大會の成功の意味も確認されません。

現在、支配階級の敵意した体制内化政策と既成政党の裏切りによつて、六月安原斗争がもう一步盛り上がりを失いつつある時、我々はそういう日和見主義を乗り越えて、斗争に決起しなければなりません。そして、政府支配階級の自説と暴露し、全人民の前に、侵略と掠奪と抑圧を続けている佐藤内閣を打倒するもう呼びかけなければなりません。

我々が問題にすることは、六月安原の「自動運転」を阻止するという形式的な法の問題ではなくして、なぜ自動運転されなければならないのか？ 昨年十一月佐藤内閣による、日米共同声明――宣言によつて空洞化した安保に替わる以上の取引きがなされたのにもがかりうず、なぜ國執しなければならないのか？ そして日米共同声明にもとづく日米両国主張の反革命運動――アジア會議、自衛隊の帝國主義軍隊化、四次防の強化、立川基地の自衛隊移管問題、軍事企業の確立、成田軍事空港建設問題、人民の生活破壊（日本帝の海外侵略）見合う国内の敵対した抑圧と榨取の政策（）など――の内実は何なのかな？

我々はささしくそのことの真諦をなし、階級社会の本質と矛盾を解決する方法を、階級斗争の發展方向を明確にしなければならない。

六月決戦とはまた、日本帝国主義者がアレジヨン民主主義のホールドのつかり、日本人民を侵略したことなくしては、どの後の日本階級斗争の一切の展

No.12
70.6.4

委員長
岸谷久雄

望む限り出し得ず、七ニ年「沖縄」の帝國主義的奴隸化反対運動を頂点とする、日本帝國主義の侵略も阻み得ないであろう。

戦後のボツダム民主主義の枠内における典型的な議会主義は、多くの社会機械の中に、とりやけん大學生・高校・中・小に機械的にどりい水うちめた、否強制的にの中に押しこなれてきたといつて方だ正しく。その議会主義の代行制は、選舉なりの方法によつて或る人の権限を移譲し、その選ばれた人達だけが何かをやり、大衆は任せざりという状況であった。しかしその少数の人がアルジヨア社会体制の枠内において事をやる以上、体制内改良主義以上の一步も出ないのである。なぜならそこにはまだせば、アルジヨア民主主義の否定を意味し、自己の依存しきる基盤とのものわが崩壊するからである。

だから、いくつの社会の中に矛盾があるうとも、どんな公害があつても、議会主義における斗いにありては、すべて体制内に、体制内的に系綱されてしまつのである。体制内改良は、体制存続と迫りを意味し、支配階級の政策の中に入りこんでしまつのである。

斗う個人の仕事の参加による全共斗運動、斗争委員会運動は、まさしくそのようなアルジヨア議会主義の極を突破し、支配階級の秩序、体制をつき崩し、大衆のエネルギーと無限に発展させたのであつた。と水故、その牛いはアルジヨアジー対アロレタリートーの二大階級の階級斗争として激烈であつたし、支配階級の興圧も遮るみないものであつた。

日本帝國主義社会においては、この帝国主義を打倒し、侵略を阻止する皇太子運動が飛躍しなげればならないのであつて、日共・民青のよくな体制内改良主義者は無用なほかないが、かえつて有害なのがある。

我々が大月決戦を前にして、学生大会を開いて呼びかけているクラス斗争委員会運動とは、人に任せることなくして、自己が、クラス全体が斗いをねつこいくものとしこあるのである。そのよくな斗いこそが社会改革の原動力となるのであって、現在の學生といふ地位に甘んじては全体にいけないのである。

大學の自治と向社会の自治でしかありえず、社会的粉碎し尽すことがひきのめひつかの斗いなのである。そしてその斗いにおいて革命派が勝利する。民主主義の確立、人民の生

の本義を最も大切なものである。階級支配